

# 「曼荼羅」私見

浅井圓道

本尊抄は御存知のように能觀段と、所觀段と、それから流通段という三つの面から書いてあるわけですが、第一の能觀段のところは、最初御存知のように摩訶止觀の第七章「介爾有心即具三千」という天台大師の性具に關する言葉をまずお引きになって、それからだんだんと理から事の法門へ移っていかれまして、最後に「釈尊の因行果徳の二法は云々」という受持護与の、日蓮聖人の最終的な隨自意の法門が説かれて、次に「当知身土一念三千。故成道時称此本理。一身一念遍於法界」という言葉で能觀段が結ばれる。その先きは所觀段で、「夫」というところから始まるわけです。

そこで私が申しあげたいのは、天台大師の摩訶止觀の性具思想は、能觀段で克服されたのですから、従って「当知身土一念三千」は所觀段の一番最初におくようなきりかたをしたらどうであろうか。それも御存知の妙樂の言葉なの

ですから、その妙樂の言葉も克服されるべき対象であると思ふのです。能觀段の最後に置くということは能觀段の結論として過ぎているような感じをもつわけです。それでこれを所觀段の最初にもってきたらどうかと私は最近思ふようになったのでありますが、その点についての御批判をいただきたいという事なのです。

それでは、どうしてそういう風に私が考えるようになったかといえますと、まず第一に密教曼荼羅と、日蓮聖人の十界曼荼羅との違いという面を明瞭にするためには、やはりそうしたらいいのじゃないだろうか。これは非常に奇体な考え方も知れませんが、妙樂の「当知身土一念三千。故成道時称此本理。一身一念遍於法界」という考え方は、たとえば金剛錒論では性具と体遍との違いを示し、そういう問題をとうして、無情有性という問題が説かれま

す。そういう考え方を伝教は六祖妙樂の次の七祖から相伝

を受けている。最澄問、道邃答の「天台宗未決」という本が今日残っているのでありますけれども、その中に少々そういう考え方が書いてあるのです。おそらくこれは妙楽が華嚴の影響を受けた結果だろうと思うのですけれども、金剛鉾論に一仏が成道した時には一仏の所証は毘盧遮那遍一切処であるから、したがって三種の一切の世間の成道も確立するのであるという考え方を体遍と呼んでいる。一身一念遍於法界という言葉はこれと同じだと思ふのです。そういう考え方が、最澄の場合には註無量義經に時々出てきます。徳一との論争書には全然出てきませんが。

やがて次には密教曼荼羅の思想が円仁・円珍・安然というふうに出てきますけれども、円珍の場合には純粹密教の著作と、純粹天台教学の著作と、それから密教と天台との関係についての著作と、この三種類に大体分けることが出来ると思うのですけれども、その純粹天台関係のものとしては、たとえば普賢經記とか、授決集あたりに妙樂の遍於法界・三千依正即・自受用身などという考え方が非常によく出てくるわけです。

それから密教関係のほうとしては、円仁の密教曼陀羅は法身の遍一切処であるが、その法身は三密具足の法身であって、真如の遍在ではない。理の遍満でなくて智用の遍満

を説くようになります。然しまだ智性の遍満の域を出ていません。それは円仁が直接最澄の薰陶を受けた結果です。そしてその最澄の真如隨緣論を頭において密教を注釈した結果、最澄の考え方のレベルを出なかつた、出ないようしようとなつたのじゃないかと、一応そういうふうに思ふわけです。それから円珍になると、円仁が法華によって顯教によって密教を注釈したのに対して、今度は密教によって法華を注釈するようになる。たとえば講演法華儀というのがあるわけですが、そこでついに法華曼荼羅の研究があらためて提起されることになるわけであります。

それから安然に行きますと、御存知のように四一十門の教判があつて、一仏一切仏、一切仏一仏、それから一切時一時、一時一切時、一切処一切処、一処一切処という四一の一大円教論が展開されると、その中の一仏というのは密教曼荼羅がまさにそれなのです。けれども、円教でいえばそれは一仏成道の時に一切衆生の成道が決つたという金鉾論の意見に注目し、しかもこれを本迹相對して寿量品で伽耶城を破したる五百尽点の昔に衆生の本成があつた。これを「師弟本成」という言葉を使つておりますが、それが密教の一仏思想と同じであると述べているのです。ところがそういう考えの基本をなしているものは、結局は法身中心で

あろうと思うのです。それに対して天台教学の正統はやはり通明三身、正在報身ですからこれとは違うわけです。法身中心ですと仏陀論を衆生論として、凡夫論として論じやすいわけです。

それは密教の特色だろうと思うのですが、密教以前の段階では、はっきりいうわけに行かないでしょうけれども、衆生論というのはむしろ仏性論として、あるいは真如論として考えられていたのが、密教にくると仏陀論として考えられるようになる。その他、教判の問題なども仏陀が法身であるか、報身であるかということで教法の勝劣が決められるというように、一切が仏陀論中心の教学になってくるわけです。しかし、それは四種の法身ということはいますけれども、要するに法身中心ですから、六即でいえば理即が私は密教曼荼羅思想の中心だと思っております。

それに対して日蓮聖人の宗教は、やはり名字即下種に中心を置く教えであります。それに対して一身一念遍於法界という考え方はやっぱり理即だと思っております。釈尊の成道という事実在即している点は密教と違いますけれども、やっぱり理即であろう。日蓮聖人の教えはそういう本来一仏一乗なることを悟る一元論から出発するのではなくて、むしろ二元の關係を受持を契機として一元化するという思想

が信仰の中心となっております。それは本尊抄の受持護与ということにはっきりとあらわれているわけです。そういう点からいきまして、「故成道時称此本理一身一念遍於法界」というあの言葉は、やはり能觀段の結論であるかのようには思わせる場所におくより、やはり所觀段の最初においた方がいいのじゃないかというふうには私では考えたのであります。

それで勝呂先生のお話と關係をつけますと、たとえば法本尊と人本尊という問題が古來あるわけなのですけれども「その本尊の為体本師の娑婆の上に宝塔空に居し」というあそこの段は、ごく平常にすうっと読んでいった感じではやはり三ヶ月後に佐渡始願の大曼荼羅が始願される、その原形があそこで書かれているのではないだろうかと思えます。そこを茂田井先生は本尊の原理論であるということと言われたので（本尊抄研究序説）誠に私も識見であらうと思うのですけれども、その大曼荼羅の中心になつてゐるのが南無妙法蓮華經で、それを能觀段の方にもどしますと、この五字を受持すれば釈尊の因果の功德を自然に譲り与えたもうということですから、やはり十界を常住ならしめている基本的条件といえますか、十界は能持の人、南無妙法蓮華經は所持の乘法であらうと素朴に考えるので

あります。十界の曼荼羅は実は安然あたりが非常に強調するところなのです。密教曼荼羅は十界曼荼羅だ。天台の十界常住の観境は胎藏界の四重曼荼羅と同じであり、金剛界の四種法身と同じである」ということを繰り返し繰り返し強調するわけにありますけれども、それは安然自身もいうように、本来一仏の姿を曼荼羅として図顯したものです。つまり十界が真如理の段階において統一されている理即の段階における十界互具なのです。

聖人の十界曼荼羅はこれと同じであってはならないのです。そこで能観段から考えますと、所観の本尊の中央に南無妙法蓮華経が大書されているということは、妙法五字に帰命した名字即における十界の相貌を表わしているのであろう。こう考えますと南無妙法蓮華経がまんなかにあることによつて密教曼荼羅との絶対の相違があるというふうには私に思ひまして、法本尊・人本尊の問題は勿論重要ではありませんけれども、それをたとえば大曼荼羅は法本尊であり人本尊ではないというようにいい方は、悪しく解釈された場合には、私は日蓮聖人の大曼荼羅の趣旨をそこなうものではないだろうかというふうに考えます。

本論文は現代宗教研究所での定例研究会の発表を筆記したものです。——文責 研究部——